

# 自然資源を活かしたエコツーリズム

— 榛名山周辺地域を事例として —

バヤンサン プレフドルゴル

## Eco-Tourism Utilizing Natural Resources: A Case Study on the Surrounding Area of Mt. Haruna

Purevdolgor BAYANSAN

### 要 旨

近年、地域振興の手段としてエコツーリズムが注目されている。本研究では、高崎市の観光を代表する榛名山周辺の地域を採り上げた。榛名山周辺地域の観光資源とは、豊かな自然環境と文化、そこで築き上げられた美しい田園風景などの魅力であるといえる。そこには、日常では見ることが出来ない高山植物が多く見られる。特に沼ノ原は、ユウスゲ群生地は榛名山の見所の一つである。

本研究では、その実態について現地調査を実施した。この高山植物の保全のためには、積極的な活動が必要である。そして、その希少な植物群を有効活用したエコツーリズム、さらには他の観光資源も総合的に活用した観光振興政策の実施が必要である。

### Summary

In recent years, eco-tourism has been attracting attention as a means of regional development. In this study, we have taken up the surrounding area of Mt. Haruna which represents the tourism in Takasaki. The tourism resources in the area surrounding Mt. Haruna are a rich natural environment, culture and scenic countryside. The area abounds in alpine plants which you cannot see in your daily lives. Especially, the habitat for yellow daily lilies in Numanohara is one of the places to see in the area surrounding Mt. Haruna.

In this study, we conducted a field survey to understand the actual situation. The survey shows

that positive activities are necessary to conserve the alpine plants and that comprehensive promotion measures should be implemented for eco-tourism utilizing the rare plant community and also for tourism with other resources.

## I. はじめに

近年、経済面における生活水準の向上を背景とした価値観の変化に伴い、人々の心の豊かさを求める志向はますます顕著になりつつあり、生活においては余暇やレジャーが重視されるようになった。それに伴い、旅行目的も従来の「慰安・歓楽」から「癒し・体験」など多様化する傾向が見られる。その結果、さまざまな地域において観光開発に伴う自然環境破壊や環境汚染が進行し、多くの問題が噴出した。

そこで、1992年に開催された地球サミットにおいて、「持続可能な発展（サステナブル・ディベロップメント）」の方向性が打ち出され、旅行者が生態系や地域の文化および自然環境に悪影響を与えず、自然環境に配慮した施設や環境教育が提案され、地域の自然と文化の保護、地域経済に貢献すること目的とした旅行形態であるエコツーリズムが注目されるようになった（米津、原、2010）。2003年度に環境省が設けた「エコツーリズム推進会議」とそれに続くモデル事業3カ年計画を大きなきっかけとして、全国でエコツーリズムに対する関心と取り組みが一気に進んだ。これまでエコツーリズムに取り組む地域は、小笠原や西表島、屋久島、北海道のような典型自然地域であったが、この会議をきっかけとして既存の観光地や里地里山など、これまでエコツーリズムと無縁であった地域が関心をもち、導入を図るようになってきている（真板、2011）。

そこで本研究では、貴重な動植物の宝庫である群馬県の榛名山・県立榛名公園における取り組みを採り上げ、同地域におけるエコツーリズム導入の可能性について考察する。

上毛三山の一つに数えられる榛名山の標高1,100m付近に、榛名湖が位置する。周辺は県立都市公園に指定され、美しい景観と、ハイキングや湖でのボート、釣り、オートキャンプなどのレクリエーションの場として、四季を通じて多くの観光旅行者でにぎわう県内有数の観光地である（高崎市商工観光部観光課、2010）。群馬県自然環境調査研究会によると、榛名山周辺地域では、観光客の誘致が優先されて、自然観光資源である景観と高山植物が劣化・衰退しつつあるという報告がある。また、高崎市観光課によると、近年、榛名山周辺地域への観光客は減少している。

以上の背景を踏まえて本研究では、榛名山周辺地域の希少性の高い自然資源を保全し、さらに自然資源を観光資源として活かし、高崎市の観光地として観光ブランドを高めていくことを重視する。そのため、榛名山周辺地域における観光資源としての植物の現状を把握する必要がある。また、高崎市における観光の現状を把握し、その中での榛名山周辺における観光の位置づけについて確認する。そして、この結果に基づき、高崎市の自然資源を観光資源として活用していくための具体的な方策について考察する。

## Ⅱ. エコツーリズムの基本的な考え方と地域における位置づけ

本章では、まず、エコツーリズムの趣旨について確認する。次に、エコツーリズムの基本的な意義を踏まえ、地域における観光への適用について先行研究に基づいて検討する。

### (1) エコツーリズムの定義

「エコツーリズム」という言葉は、1983年にメキシコのヘクター・セバロス＝ラスキュレインが初めて使ったとされているが、その以前にもエコツーリズムについて様々な動きがあった。1972年、ストックホルムで開かれた国連人間環境会議で、「サステイナブル・ディベロップメンタル・ユース (Sustainable Developmental Use)」(資源を持続的に利用する) という考え方が提唱された。この考え方を受けてガラパゴスで1970年代の中ごろに始められたのが、エコツーリズムの前身となる「マネージメント観光」である。これは、ツアーで得た収益をガラパゴス諸島に生息する稀有な生き物たちの保護に利用したり、地域住民に還元したりすることで、自然環境の保護や地域経済の振興を図ろうとする新しい観光の形態であった。1980年代に入ると、コスタリカでも同様の運動が興った。この時に初めて、「エコツーリズム」という言葉が使われるようになったと言われる(エコツーリズム推進協議会、1999)。

エコツーリズムは様々な研究者によって数多くの定義が示されている。国際エコツーリズム協会によると、「エコツーリズムは、自然環境を保全し、地域住民の福祉の向上に貢献する、責任ある旅行である」と定義されている(敷田・森重、2011)。また、オーストラリアのエコツーリズム協会は、「エコツーリズムとは、自然体験を最大の関心としながら、環境や文化を理解・尊敬・保全する涵養ことをする生態学的に持続可能な観光である」と定義した(敷田、2009)。

このように、エコツーリズムには様々な定義があるが、総合的に捉えるとエコツーリズムとは、貴重な自然環境や歴史文化を未来に守り伝え、引き継ぐための手段であると言える。すなわち、自然環境を楽しみながら自然資源を守り、さらにそれが保全活動・地域振興などにつながっていく観光のあり方である。

### (2) 日本におけるエコツーリズムの位置づけ

日本においては、1990年代初めごろにエコツーリズムの考え方が取り入れられた。1990年に環境庁が、国立公園の新たな利用方策としてエコツーリズムに着目してモデル地域調査を開始し、1992年には日本環境教育フォーラムが環境教育の観点から関心を持ち、エコツーリズム研究会を発足した。日本では2007年に成立した「エコツーリズム推進法」の第2条において、エコツーリズムを「観光旅行者が、自然観光資源について知識を有するものから案内または助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及

び理解を深めるための活動」と定義している（敷田・森重、2011）。また、日本自然保護協会（NACS-J）は、「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行形態」と定義している。日本のエコツーリズムの特徴は、経済的効果だけでなく自然環境の保全や地域との関わりが強調されることである。特に、地域づくりや地域再生の方法としてのエコツーリズムに地域では大きな期待が持たれてきた。

### （3）地域におけるエコツーリズムの位置づけ

近年、地域における自然環境の保全と観光振興、さらに地域振興の手段としてエコツーリズムへの関心が急速に高まっている。下村（2010）は、「生物多様性を社会に多様な生物との共生社会を実現するためには、生物に関する情報や生態系の仕組みについて知識を得ることだけでなく、その前提とも言うべき人と自然との結びつきを回復し、現代社会に応じた新たな関係を再構築することが課題となっている」と述べている。敷田（2010）は、「エコツーリズムは、ある意味で地域の要素を資源化させる「ツール」である。そして資源化させただけではなく、それを地域外の観光客に利用させ、対価を手に入れるという仕組みを持っている」と述べている。小林（2002）は、「地域ぐるみで自然環境や歴史文化など、地域固有の魅力を観光客に伝えることにより、その価値や大切さが理解され、保全につながっていくことを目指していく仕組みである。観光客に地域の資源を伝えることによって、地域の住民も自分たちの資源の価値を再認識し、地域の観光のオリジナリティが高まり、活性化させるだけでなく、地域のこのような一連の取り組みによって地域社会そのものが活性化されていく」と述べている。

地域固有の魅力を地域以外に人に伝える以前に、住民が自分たちの資源を認識し、地域に誇りを持つことが大切である。エコツーリズムの多くは、大都市から離れた自然環境が豊富な地域や以前からの観光地域において行われており、日本においては、小笠原や西表島、屋久島、北海道のような典型自然地域である。このような地域については、様々な研究が行われている。群馬県の榛名山・県立榛名公園においても、自然環境科学的な面では様々な研究が行われているが、社会的な視点からのエコツーリズムに関する研究は見当たらない。

## Ⅲ. 榛名山周辺地域の自然資源の特色と自然資源の保全方策

榛名山周辺地域において自然資源を生かしたエコツーリズムを推進するために、活用が期待される資源としての植物の現状を確認する。希少性が高いユウスゲ群生地「沼の原」について、現地調査と実験を実施した。

## (1) 沼の原の植物の現状

かつて榛名高湖は大きな湖で、榛名富士をぐるりと取り巻いていた。しかし約2万1千年前の相馬山、約1万年前の水沢山、さらには6世紀の二ツ岳の活動で噴出した火山灰や軽石のため東側が埋められ、現在の形になった。沼の原は、かつて水を湛えていた榛名湖が埋め立てられた跡である。沼の原は東に向かって緩い上りの傾斜になっているため、榛名湖に近い西側の低地部分は湿原となり東側のヤセオネ峠に近づくにつれて乾燥度が増して樹木が多くなっていく（栗原、2009）。

沼の原の湿原は、貴重な湿原植生が残されている。沼ノ原は、以前よりユウスゲなど美しい花を咲かせる湿地性植物の自然観光が盛んである。沼の原には「ユウスゲの道」と名づけられた散策路がある。2002年の群馬県の調査により、ここに43科154種5変種の維管束植物の生育が確認された（松澤、2003）。群馬大学の石川研究室を中心とした近年の観察結果によると、沼ノ原において、観光客の増加と木道の壊れたことにより、人間が散策道をはずれて植生を踏みつけ、無数の「ケモノ道」ができてしまい、そこでは植生が完全に消失してしまっている、いわゆる「オーバユース」状態にある部分が各所に見られる。またビッチュウミヤコザサが繁茂して植生を覆ってしまい、高山植物が生育できなくなっている場所が複数ある。

## (2) 調査方法と結果

**a) 現地調査：**各調査地における植物の生育環境の現状、および植物に対する観光客および管理状況の影響を解明するため現地踏査を実施した。沼の原において、次の地点で生育する植物相を中心に行った。

- ・設置された木道・クマザサが繁茂している地点、
- ・クマザサを刈り取ってから1年目、
- ・クマザサを刈り取ってから2年目の地点

これらの生育が確認された種の写真を撮影して種の同定を行った。調査は2012年6月8日、7月21日、8月29日に行った。

この調査の結果、榛名山・県立榛名公園全体として、亜高山帯の湿った場所を生育場所とする植物が多数生育していることが確認された。このように、現地調査・植物実験を継続的に行うことによって、その地域およびその地域に生育する植物の特性を明らかにすること重要である。

**b) 生育環境計測：**自動記録システムを各調査地に設置し、植物にとっての生育環境条件である気温、土壌含水率、相対光強の連続測定を行った。2012年8月29日に12地点で、土壌含水率について測定を含水率計（ThetaprobetypeML1,Delta）を用いて、各地点の林床植生の直下において、各3回ずつ測定した。また、調査対象とした3地点について、生育する植物相（生育しているすべての植物名）および生育状況をリストアップした。さらに次ぎの各地点： a. ササの上、下 b. すすきの上、下 c. 木の下において光量子センサー（ライカ社製LI190SA）を用いて、光

量子密度を測定した。

この結果は、開花・生育期間中における土壌含水率には大きな地点間差は見られなかったが、低いササの地点はやや乾燥していると考えられる。相対光量子密度を測定した結果から見ると、ビッチュウミヤコザサの下は非常に暗い環境になっている。

**c) 発芽実験：**様々な温度条件のもとで種子を培養して、発芽にとって最適な温度条件を解明する。実験に用いる種子は榛名山公園で主な植物の種子を採集して8種類の在来種の種子を用いた。

その結果は、発芽実験に用いた榛名山公園産の植物の種子の発芽の温度依存性は、2つのグループに分かれるが、いずれにしても25℃または30℃という比較的高い温度で良く発芽することが分かった。つまり、主に夏に発芽すると考えられる。

**d) 栽培実験：**様々な温度条件と光条件のもとで植物を栽培して、最適な栽培条件を解明する。さらにクマザサによる被陰の生長に対する影響を検証するために行った。この結果はユウスゲとオミナエシについて、苗を各種の光条件（相対光強度で100%が最も明るく、3%が最も暗い）下で栽培したいずれの種も明るい（100%）条件下では生長するが、暗い（3%）とほとんど生長しない、つまり、ビッチュウミヤコザサなどに覆われると、生長できなくなる危険性があることが分かった。

ユウスゲとオミナエシについて、苗を2種の温度条件（15/10℃および25/13℃）下で栽培した。ユウスゲは温度が低く（15/10℃）でも、高い温度（25/13℃）下と同じくらい生長するが、オミナエシは温度が低いと生長が悪くなる。つまり榛名山公園のような標高では、ユウスゲは相対的に生長期間が長く、オミナエシは短いと考えられる。

ユウスゲとオミナエシについて、苗を2種の温度条件（15/10℃および25/13℃）下で栽培した。ユウスゲは温度が低く（15/10℃）でも、高い温度（25/13℃）下と同じくらい生長するが、オミナエシは温度が低いと生長が悪くなる。つまり榛名山公園のような標高では、ユウスゲは相対的に生長期間が長く、オミナエシは短いと考えられる。

### （3）研究結果に基づく考察

以上の実験結果から、自然観光資源である景観と植物が劣化・衰退する最大の原因は、ササ刈りなど自然に対する人間の働きかけが減っていることによる影響と考えられる。またワイド木道の敷設のような、利用と保全のバランスを欠いた形の整備が行われると、植物種多様性を低下させ、結果的に観光資源としての価値さえも激減させて、持続可能な利用を不可能にすると考えられる。

## IV. 榛名山周辺地域における観光振興の取組み

本章では、豊かな自然美、文化の魅力に恵まれた観光地である、榛名山周辺地域における観光

の取組み方策について考察する。

### (1) 榛名地域の現況<sup>1)</sup>

榛名地域は、群馬県の中西部に位置し、人口は約2万2千人（2005年国勢調査）、地域の面積は93.59km<sup>2</sup>である。高崎駅からは支所のある下室田町まで約15km、最寄りのインターチェンジである関越自動車道前橋インターから下室田町までは約16kmである。また、長野新幹線安中榛名駅より東京駅までは約70分である。

榛名地域は、北部を榛名山と榛名湖、南部を里見連山丘陵に囲まれ、東西約13km、南北約14kmである。地域の南部には山間の小溪流を集めて西から東に流れる烏川があり、これに沿って平野部に水田や果樹園と市街地が形成されている。

榛名地域の産業構造には、農業、林業などの第一次産業の比重が比較的高いという特徴がある。2005年国勢調査により産業別就業者数をみると、第一次産業の占める割合は、高崎市全体では2.1%程度であるが、榛名地域は12.5%を占める。特に東日本一の生産量を誇る梅をはじめ、梨や桃、プラムなどの果樹栽培と、乳用牛、肉用牛、豚、採卵鶏、ブロイラーなど多様な畜産が中心となっている。

### (2) 榛名山周辺地域における観光の現状<sup>2)</sup>

上毛三山の一つとされる榛名山の標高1,100m付近には、榛名湖が位置する。周辺は県立都市公園に指定され、美しい景観と、ハイキングや湖でのボート、釣り、オートキャンプなどのレクリエーションの場として、四季を通じて多くの観光旅行者でにぎわう県内有数の観光地である。しかし、近年では、自然保護の立ち遅れや施設の老朽化、施設の管理体制の見直し、案内・情報施設や駐車場の整理統合、車両動線と歩行動線の整理、景観の質的向上などの必要性と入込客数の減少が課題として顕在化している。榛名山周辺地域の観光動向について、「高崎市観光振興計画（2008年度観光客数・消費額調査）」に基づいて地域別の観光入込客数を見ると、高崎地域がもっとも多く367万人であり、次いで榛名地域が107万人となっている。さらに観光入込客について、県内外の割合を地域別に見ると、高崎地域では、県外客42.6%、箕郷地域が45.9%、榛名地域が9.4%となっている。

観光消費額について、地域別に見ると、高崎地域が最も多く117億6千万円で、次いで榛名地域が48億8千万となっている。高崎地域の観光消費額が他の地域に比べて多いのは、高崎駅を利用する県外からのビジネス客多いことによるものと考えられる。それを除くと榛名地域の観光消費額の大きいことが確認できる。

### (3) 榛名山周辺地域における観光政策とその評価

#### a) 榛名観光振興計画

榛名観光振興計画は、高崎市第5次総合計画により榛名地域が「観光交流ゾーン」と位置づけられたことを受け、2008年度から2019年度を計画期間として、2008年3月31日に策定された。その要点について確認する。榛名地域の観光エリアはその特性から、榛名湖・榛名神社を中心とする「かみのエリア」と「くだもの街道」や榛名梅林に代表される「さとのエリア」に分けられている。

榛名観光振興計画では、榛名地域における観光の現状と観光資源について整理されている。また、榛名地域の観光振興に関する課題について検討されている。さらに、検討により抽出された各々の課題に対し、様々なアクションプランが策定されている。それらの内容は、(表1)に示すとおりである。

(表1) 榛名地域の観光課題とアクションプラン

榛名地域の観光の課題	課題へのアクションプラン
1.観光資源の保全が不十分	都市公園としての明確な位置づけ 「SOS榛名湖」プロジェクトの推進 榛名湖周辺パフォーアッププロジェクト 榛名ニューツーリズム
2.地域固有の名物が無い	社家町再生アクションプロジェクト
3.新たな観光資源の発見・発掘が不十分	課樹資源の徹底活用 榛名グリーンツーリズムの推進 農林業環境整備による観光振興基盤の強化
4.地域資源間の連携・ネットワーク化が不十分	各観光資源をつなぐルートを設定
5.広域的な観光連携が不十分	広域な観光ルートを設定

(出典) 高崎市商工観光部観光課 (2010) 『高崎市観光振興計画2010』

本計画は、榛名地域におけるこれまでの観光振興に関する取組みの状況を把握し、それらの成果や問題・課題を評価した上で、榛名地域における実現可能な観光振興策としての性格が強いものとなっている。また、地域別に観光振興の目標が詳しく立てられている。しかし、具体的な期間や自然保全と自然資源の活用について行動計画が示されていない。榛名地域については、豊かな自然や歴史、文化など地域固有の観光資源が豊富に存在するにもかかわらず、その活用と連携が不十分である。

## IV. ヒアリング調査の結果と考察

榛名地域の観光の現状を踏まえ、その課題を克服し優位性を生かすため榛名観光振興計画の進捗状況について考察する。そのために、高崎市の観光振興を担当する高崎市観光課へのヒアリン

グ調査を2013年10月10日に、さらに、榛名観光協会へのヒアリング調査を2013年10月26日に実施した。以下では、ヒアリング調査の際に提供された資料をもとに、榛名山周辺地域の観光振興について考察する。

### (1) ヒアリング調査の結果

ヒアリング調査により、榛名山周辺地域の保全に関して高崎市や榛名観光協会が具体的に実施していることは、榛名山周辺の市民のボランティア活用に対して榛名観光協会から支給している一年一度の補助金程度であり、具体的な保全事業は、殆ど行われていない状況であることが分かった。

観光地としての榛名神社に関する情報発信と「社家町」再生プロジェクトは計画通りに進んでいる。「社家町」再生プロジェクトは、元々商店街であり名物料理がなかった「社家町」において、来客にそばを提供した歴史を復活させたものである。このプロジェクトは実際に実施されている。また、榛名ブランドであり地元産の銘柄鶏を使った「はるなコケッコー」<sup>3)</sup>が2010年9月1日より本格的にスタートしている。

以上のことから、現在のところ自然資源を活かした具体的な観光振興政策や行動が実現されていない状況であることを確認した。

### (2) ヒアリング調査に基づく考察

ヒアリング調査により、榛名山周辺地域には特色ある様々な観光資源が存在するにもかかわらず、情報発信やPRの不足から、誘客や地元商品の販売に十分結びついていないことが分かった。さらに、地域資源の価値と魅力を伝えるインタープリターの存在とその育成が見られない。また、榛名山周辺地域では、自治体間や地場産業との連携が進んでいない。

榛名山周辺地域は群馬県立榛名公園であり、自然公園的な「都市公園」<sup>4)</sup>である。しかし、都市公園としての明確な性格づけやその理解が十分にされていない。そのため、観光地として認知されながら、榛名山周辺地域の整備・開発、観光振興が十分に進められてこなかったと考えられる。榛名山周辺地域については、県と市の連携のもとに、環境保全・再生型の都市公園として整備していくことが必要と考えられる。

ちなみに、榛名山周辺地域に近い赤城山周辺地域では、環境教育プログラム策定推進のための広域連携組織「赤城クリーン・グリーン・エコネットワークの環境教育プログラム専門部会赤城自然塾」が、文部省の学習指導要領に対応した環境教育プログラムづくり、赤城地域の環境課題の解決と環境保全、自然の仕組みを理解するという目的で、山頂付近の大沼・小沼・覚満淵をはじめ、ふれあいの森、青少年交流の家、昆虫の森、サンデンフォレスといった施設など地域の豊富な環境資源を活用して環境教育プログラムを策定し実践すること、環境課題を教材にしたプログラムを実践すること、また、そのための支援活動を推進する活動を積極的に進めている。この

ような住民、行政、観光団体、研究機関、第一産業団体との連携活動が榛名山周辺地域にも必要である。

## V. おわりに

本研究では、高崎市の観光を代表する榛名山周辺の地域を採り上げた。榛名山周辺地域の観光資源とは、豊かな自然環境と文化、そこで築き上げられた美しい田園風景といった魅力であると言える。そして、このような観光資源や魅力を失うことなく持続的な観光振興に活用していく具体的な方策について考察した。

観光資源としての植物の現状を解明するために、現場調査と実験を実施した。その結果、榛名山・県立榛名公園全体として、亜高山帯の湿った場所を生育場所とする植物が多数生育していることが確認された。また、現地調査・植物実験を継続的に行うことにより、自然観光資源である景観と植物が劣化・衰退する最大の原因は、ササ刈りなど自然に対する人間の働きかけが減っていることによる影響であることが分かった。そのため、榛名山周辺地域の希少な植物を、人の働きかけにより観光資源化させて利用することが有効となる。すなわち、観光として期待されるエコツーリズムの導入が、結果として榛名山周辺地域の希少な植物の保全につながる。

榛名山周辺地域の観光振興方策については、榛名観光振興計画では観光資源が持つ価値と現状を踏まえ、全体目標を「一級の観光地はるなの再生」としているものの、ヒアリング調査により、地域自然資源の活用・保全について具体的な観光振興政策や行動が実現されていないことが分かった。

魅力的な観光資源の持続的活用によるエコツーリズムの展開には、これを担う人材の育成、地域の体制づくりが重要となる。そのために住民、行政、観光団体、研究機関、第一産業団体との連携活動が榛名山周辺地域にも必要となる。榛名山周辺地域の観光の特徴である自然資源を対象に、具体的なエコツーリズムプログラムの開発を行うことにより、榛名山周辺地域における観光事業の持続的発展と地域振興さらに環境保全に大きな効果が期待できる。今後は、榛名山周辺地域における、エコツーリズムの導入方策についてさらに検討するとともに、地域振興におけるエコツーリズムの役割について考察を深めていきたい。

(ばやんさん ふれふどるごる・高崎経済大学大学院地域政策研究科博士後期課程)

### 註

- 1) 榛名観光振興計画、(2007)による。
- 2) 榛名観光振興計画、(2007)による。
- 3) 「なるなコケッコー」とは、榛名山の水を、使用して、榛名山麓で育った良質の鶏肉、野菜(群馬県産)の使用にこだわってオリジナリティー溢れる料理です。(榛名湖らしい、店独特のもの)
- 4) 都市公園は、都市公園法1956年 法律第79号に基づき設置された公園である。

## 自然資源を活かしたエコツーリズム

### 参考文献

- エコツーリズム推進協会編『エコツーリズムの世紀へ』エコツーリズム推進会, 1999
- 大野 裕司『里地里山の身近な自然と生活文化を活かした飯能市エコツーリズム』自治研修研究会, 2010, pp40-44
- 片山 義博『地域資源の活用と持続可能な地域づくり』自治研究中央推進委員会, 2013, pp68-71
- 栗原 久『榛名学』2009
- 小林 英俊『エコツーリズム教本—先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド』2002
- 小林 英俊『エコツーリズムによる魅力ある地域づくり』自治研修研究会, 2009, pp24-31
- 敷田 麻美『地域からのエコツーリズム—観光・交流による持続可能な地域づくり』2009
- 敷田 麻美『生物資源とエコツーリズム』環境研究, 2010, pp81-90
- 敷田 麻美・森重 昌之『地域資源を守っていかすエコツーリズム—人と自然共生システム—』2011
- 下村 彰男『生物多様性を社会に浸透させる手段としてのエコツーリズムの活用』自治研修研究会, 2010, pp21-25
- 高崎市商工観光部課『榛名観光振興計画』2007
- 高崎市商工観光部課『高崎市観光振興計画』2010
- バヤンサン・ブルフドルゴル『群馬県の亜高山帯における自然観光資源としての植物の保全のための環境科学的研究』2013
- 真板 昭夫・石森 秀三・海津 ゆりえ『エコツーリズムを学ぶ人のために』2011
- 松澤 篤郎・小暮 市郎『植生・草地・草原地域・榛名山良好な自然環境を有する地域学術調査報告書』2003
- 米津 達哉・原 美登里『神奈川県丹沢地域に於けるエコツーリズム事業にみるエコツアー実施団体とエコツアーガイドに関する一考察』地域環境研究, 2010, pp161-171